

遊び場面におけるリスクマネジメント

Risk management in playground

板東 愛理香
Erika Bando

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード：遊び, リスクマネジメント, 事故要因分析

Key words : Play, Risk management, Accident factor analysis

1. 研究目的

これまでの保育において、遊び場面でのリスクマネジメントは様々な分野から論じられてきた。具体的には、医学、工学、安全学の側面から大人が子どもの「傷害」を予防することに重点をおいた研究群(西田・山中,2019 他)がある一方で、保育や教育、子どもの遊びの権利、子どもの発育・発達の側面から、遊びの価値の重要性を訴え子どもが自ら「危険性」を回避する力の存在に重点をおいた研究群(大坪ら,2011 他)がある。これらは、それぞれの分野からその重要性が示されるにとどまっている。その結果、認識が共有されておらず“保育の遊び場面における「危険性」とは何か”捉えられない状態を引き起こしている。

より具体的に言い換えると、保育現場では保育者の「危険性」を捉える指標が存在していないと言えるだろう。そのため、保育者が目の前の状況を危険か否か判断する「見極め」は、保育者の経験によって培われた感覚的な判断に委ねられている。ひいては「危険性」が放置され、ひとたび事故が起きると“なぜ「危険性」を放置したのか”と保育者個人の責任だけが問われる現状が多く存在するのである。したがって、まずは遊び場面における「危険性」とは何かを明らかにすることで、保育者の遊び場面における「危険性」を見極める観点を明らかにすることが必要である。

そこで本研究では、まず国際規格及びこれまでの保育における先行研究に示された「危険性」をめぐる概念の整理を試み、新たな定義を示した。

さらに、より具体的に遊び場面の「危険性」を捉えるため先行研究から複数の「事故要因分析モデル」を用いて、保育における「リスク」の仮説を生成した。そして、大型積み木を使用する遊び

場面を通して生成した仮説の適用可能性を明らかにした。以上の手順から、本研究では保育の遊び場面における「危険性」とは何かを明らかにすることで保育者の遊び場面における「危険性」を見極める観点を探索的に明らかにすることを目的とする。

2. 研究実施内容

対象 保育施設 5 歳児クラスの保育室に設置された「大型積み木コーナー」を使用する 5 歳児クラスの子ども 26 名、その保育を行う保育者 5 名。

手続き 大型積み木を使用した遊び場面を、カメラ 2 台を使用し映像で記録する。その内、1 台は大型積み木の高さが把握可能な位置から記録。加えて、もう 1 台は斜め上方から「大型積み木コーナー」全体とその周囲の子ども及び保育者の動き、大型積み木の中に入る子どもの動き及び保育者の動きを記録した。また、対象となる保育者 1 名に、意図や背景について聞き取りを行った。

分析方法 本研究は「事故要因分析モデル」である「t-m-SHEL モデル-RCA ハイブリッド分析手法」を思考のモデルとして分析を行う。まず、記録した映像から「ズレ」(時間軸の中で各要因が発生した時点、調和がとれた状態からの逸脱)を抽出し「事例」を特定した。続いて、「ズレ」がなぜ発生したのか RCA 分析を用いて要因を抽出する。そうして、抽出された要因を仮説として生成した要素に分類する。

3. 倫理的配慮

本研究は大妻女子大学生命科学研究倫理委員会より承認(受付番号 02-010)を受け実施した。

4. 結果

「事例」分析の結果「ズレ」によって以下の要因が抽出された。

「S ソフトウェア」マニュアル,ルール

(1)クラスのルールからの「ズレ」
大型積み木についてクラスで定められたルールから逸脱した時点。

(2)遊びのプロセスからの「ズレ」
遊びのプロセス(イメージ発生,提案と共有,新たなイメージ発生)が展開している状態から逸脱した時点。

「H ハードウェア」物的な環境の状態等

(3)積み木の積まれた状態からの「ズレ」
積み木のバランスが安定して積まれた状態から逸脱した時点。

(4)積み木が床に置かれた状態からの「ズレ」
積み木のバランスが安定して置かれた状態から逸脱した時点。

(5)積み木の整備状態からの「ズレ」
積み木に劣化・故障した箇所がない状態から逸脱した時点。

「E 環境」周囲の環境状態

(6)環境状態からの「ズレ」
「大型積み木コーナー」の床に積み木以外の物が置かれていない,落ちていない状態から逸脱した時点。

「K-H 物的な環境と子どもの発達の適合性」

(7)子どもによる積み木の積み方からの「ズレ」
子どもの積み方により,積み木のバランスが安定して積まれた状態から逸脱した時点。

その後,抽出された「ズレ」は終結していく。その過程は次の様に分類される。

「ズレ」後の「介入」パターン

- (1)「ズレ」後の「介入」あり
- ・保育者が「ズレ」に「介入」し「回収」した事例
 - ・子どもが「ズレ」に「介入」し「回収」した事例
 - ・保育者が「ズレ」に「介入」し「回収」しなかった事例
 - ・子どもが「ズレ」に「介入」し「回収」しなかった事例
- (2)「ズレ」後の「介入」なし
- ・「ズレ」が「回収」されずに「傷害」を負った事例
 - ・「ズレ」が「回収」されずに「ニア・ミス」

となった事例

- ・「ズレ」が「回収」されずに何も起きず「消滅」した事例

こうして「ズレ」によって抽出された要因は[S][H][E][L(K-H)]と対応することが示された。そして、「ズレ」後の「介入」及び「回収」は,[m マネジメント]と対応することが示された。これらは生成した仮説へ位置付くことが示された。さらに,RCA分析を行うことで「ズレ」に至った背景的及び根本的な要因を抽出した。それにより,一部抽出が困難であった要因を除いて仮説に示されている要因と対応することが明らかになった。

5. 考察

本研究では大型積み木を使用する遊び場面を通して生成した仮説におけるより具体的な要因が明らかになった。それにより,抽出された要因が遊び場面の「危険性」を捉える具体的な観点となることが示された。まず,[S][H][E][L]の要因は「リスク」を捉える観点において骨格,[m]は各要因の「リスク」を上下させる要因である。中でも「ズレ」発生した後に見られた「回収」は保育者・子どもによって対象となる状況における「リスク」の確率を下げると言えるだろう。また「ズレ」が発生することで対象となる状況の「リスク」が上がると思われる。保育者は「ズレ」を気配感のレベルで察知し,許容可能か否かを判断している可能性がある。

6. 今後の課題と可能性

「危険性」を捉える具体的な内包を明らかにするに当たって一部抽出に至らなかった要因があるため,データの収集・分析方法を検討する必要がある。また抽出した「危険性」のどこまでが許容可能であるのか「評価」を行う必要がある。

7. この助成による発表論文等

②学会発表

- [1]板東愛理香,大型積み木を使用した初期段階の遊び場面におけるリスクマネジメント,日本保育学会第74回大会,2021/5/15.16,富山大学(富山県富山市)(発表確定)

引用・参考文献

- [1]西田佳史,山中龍宏(2019)保育・教育施設における事故予防の実践,中央法規出版

[2]大坪龍太,遠藤幹子,川上正倫ほか(2011)子どもの遊び場におけるリスクの効用に関する調査研究,子ども環境学研究,7(1)